

## 北陸初の中世木造五重塔

工学部建築建設工学科 藤田 勝也

福井市の西南部、丹生山地の東方に位置する清水町は、穏やかに稜線を描く山並みに囲まれた平野部のほぼ全域が水田で、山と田圃の広がり集落が点在するという景観の、まことにのどかな農村地域である。

その清水町で2001年秋、中世にさかのぼる大規模な木造塔跡が発掘された。現場は町の東部、日野川の西方、福井市にほど近い「大字片山小字新光寺」の地区である。中世の片山には、小字名「新光寺」におそらく通じると思われる、真光寺という名の寺院があったことが知られている。ただしこの真光寺については、京都東寺との関連から真言宗、そして5つの末寺を擁する有力寺院ながら中世末の一向一揆で消滅した、という程度がわずかな現存史料から窺えるばかりの、まさに「幻の寺院」であった。しかし塔跡の発掘によって、真光寺は数百年ぶりにその姿の一端をあらわしたのである。

発掘現場は、頂上に城郭が推定される山の西裾、標高32メートル、水田面との比高20メートル付近の丘陵部の、高さ約7メートル余にわたる地山掘削によって造成された平坦面である。平坦面は約20メートル四方の規模で、東は切土の斜面、南と北は土盛および木々に覆われ、視界は西方のみ開かれる。発掘遺構は方位に整然と従っており、きわめて計画的な造営が窺われる。検出されたのは塔の中心にたつ柱（＝心柱）の礎石（＝心礎、ただし本来の位置から移動）、心柱の四周にたつ4本の柱（＝四天柱）の礎石のうちの1つ、そして塔初層の外観を形成する外側の柱（＝側柱）の礎石を安定的に据えるための地業石（＝根石）などである（写真1）。地業石につ



写真1) 木造塔の発掘現場、心礎と側柱地業

いては塔の場合側柱12本つまり12カ所あるが、このうち検出された9カ所すべてが本来あるべき位置にあった。その他、抜き取られた側柱の礎石の1つを検出し、これには柱跡の痕跡が鮮明に確認できる。

礎石に残された痕跡や現場南方斜面における炭化物層、溶解した銅製品片・鉄釘といった出土遺物などから、木造塔が火災により倒壊したことは間違いなく、跡地には九重もしくは十三重の石造塔が造立されている。一部残存する石造塔の様式から、その建立は南北朝から室町時代前期とされ、基壇には木造塔の礎石が転用されている。つまり木造塔の造営は石造塔以前、あるいは鎌倉時代に遡る可能性がある。

発掘された心礎は1メートル近い巨岩である。もとより多宝塔に心礎はなく、またこの時期の三重塔は心礎をもたない。初重総間の寸法は側柱の真々距離（柱の中心間の距離）にして約5.4メートル＝約18尺である。事例がないことはないが、三重塔とするとときわめて異例の大きさとなる。いっぽう現存する五重塔をみると、31尺を超える教王護国寺すなわち東寺の五重塔があるものの、事例がもっとも多いのは16尺程度で、これらはみな近世に発展した寺院・霊廟の塔とはいえ、真言宗など古代仏教寺院の五重塔では規模が大きい傾向にあるというから、初重総間が約18尺というのは五重塔としてまったくもって不自然ではない。また瓦類は一切検出しておらず、屋根は檜皮葺もしくは薄板を葺き重ねたこけら葺と考えられる。

総高の推定には、初重総間の寸法が参考になる。初重総間が約18尺で、真光寺の塔に年代の近い五重塔を現存遺構に求めると、1440年造営の法観寺五重塔（八坂塔）が挙げられる。この塔の総高が128尺（約38メートル）であり、これより時代が遡ることを考慮しても、今回発掘された五重塔は30メートル近い高さを誇っていたものと推定されるのである。

法観寺五重塔は、『八坂法観寺塔曼荼羅』がその中心に描く通り、中世京都東山におけるランドマークであった。否、かつては清水寺の門前町として栄え、歴史的景観を色濃く残していることから国の重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている産寧坂・二年坂の地域において、法観寺五重塔は四季を通じて訪れる散策者にとっていまなお格好の景観的シンボルであり、町並み景観の



写真2) 発掘現場から西方を見る

重要な要素である。翻って、真光寺塔跡の発掘現場から西方を望むとき、のどかな田圃風景と集落そしてはるか遠方に山並みが一望できる（写真2）。西方の集落、田圃の人々にとって、東方山裾に夕日を浴び照り輝く五重塔は、おそらく日々仰ぎみる風景に欠かせない存在だったろう。

発掘担当（清水町教育委員会）の古川登さんのお話によれば、約2年前の樹木の伐採にはじまる調査作業の端緒は、ここに何かありそう、という「見当」にもとづくものであって、したがって発掘当初は調査員たちの、週末休みを利用しての手弁当による作業だったという。開発にともなういわゆる行政調査などではなかったのである。遺跡の発掘には「偶発」性をともなうという面があるが、今回の塔跡の「発見」は、発掘に対する熱い情熱と地域文化への強い愛着によってこそもたらされた、まさに「必然」であった。そうした情熱と愛着に敬意を表しつつ、現在筆者の研究室では、この五重塔の建築の復元作業を鋭意進めているところである。

